



郵便振替 02710-3-570 あごら札幌

No. 202

あごら札幌 連絡先
細田 (011)
644-2927

今月通信担当
細田英理子

《 今 月 の 内 容 》

選択. 貧しさ. そして買売春	ストップ核のゴミ派遣団 (ドイツの巻)
..... 1.2 6.7
例会案内	情報
..... 2 8
子供への虐待を扱った マンガを読んで	
..... 3.4.5	

1996.5.1 発行(5-6月合併号)

通信購読料 1,940円 (年間)

「選択。貧しさ。そして買売春」(前編)

中山治光

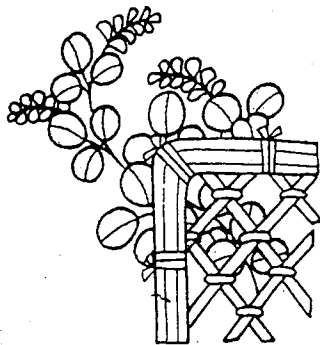
中山の両親は子どもの教育に力を注いだ。自分たちが教育を受けられなかった分、子どもには教育をという両親の当時の思いは、あれから30年以上たった今のほうが生々しく感じられる気がする。おふくろは小学校をでたが、おやじにはそれすらもかなわなかった。両親とも家が貧しかった。

両親は息子が成長していく道すがら、少しずつしぼんでゆく息子への期待の大きさを知らされていくのだが、なんとか入ることができた大学で中山は現実に対して疑問を持った。両親は息子を大学に入れて報われた頂点で息子に裏切られた。

大学をでても息子は進路を見きわめきれず、大阪に住み着いたあと、なにをしているのかわからなくなった。息子は釜が崎の日雇い労働者になった。中山は日雇い労働者を「選択」した。

今、ここで「選択」ということばを意識し両親の生き方や自分を見つめなおす機会をもてたのは、タイの「ニューライフセンター」のディレクター、ローラン・ベセルさんが去年の秋来日し、タイの山岳民族の少女たちが買売春とのかかわりの中でおかれている状況をはなした、そのはなしを知ったからだ。彼女のはなしや「ニューライフセンター」の活動を通じて「選択」を考えてみたい。主に参考にさせてもらった資料は、ローランさんの来日に際してカスパル(アジアの児童買春阻止を訴える会)から送ってもらった資料と1995年11月10日にNHK教育テレビで放映された「少女売春との闘い—タイ、ニューライフセンターからの報告」です。

子ども買売春をめぐる状況は「あごら」200号に書かせてもらったように厳しい。



来日したローランさんは、日本の高校生ともはなしあいの場をもった。BBCの番組のビデオを一緒に見終わったあとで、ある女子高生の「どうしてつらいめ



にあっているのに愛する子どもに売春をくりかえすのか？」—ビデオのナレーションの中に「(その場面にでている)子どもたちのほとんどは元娼婦の娘や息子たちで、女の子はいずれ母親の仕事をするようになるのです」とあったことをさす—との質問に答えてローランさんは「母親たちも、あきらめに似た気持ちで同じことをくりかえしてしまっただけです。貧しい多くの村の人たちは十分な教育を受けてないので、収入を得る選択肢はこれしかないと思

ってしまっているんです。生きていくためには、かつて自分が家族を思いそうしたように娘は売春するしかない。選択の余地がないと人間は普段やれないこともやってしまうのです。だから、人間は選択する自由があるというのはとても大事なのです。自分の意志がもてることはしあわせなことなのです」と答えた。

ニューライフセンターは、アメリカ人宣教師ルイス夫妻がタイの中でだまされたり売られたり、そうでなくても家族の極度の貧しさのために売春に入っていくという困難な状況にある山岳民族の少女たちを憂い、売春にかわる経済的精神的オルターナティブを提供する場として1987年チェンマイに設立。ディレクターとしてローランさんを招いた。

センターには、1995年5月現在、113人の少女が寄宿。そのうち20~30%の少女が買春宿から救出され、70~80%の少女はそういう経験はもたないが、その危険にさらされていた。(次号に続く)



「喜びの秘密」読書会で「性器切除」の問題を考えよう!

5月25日(土) PM 6:30~ 女性センター(大田西9)

5
月
例
会
案
内

性器切除(女子割れと呼ばれてきたもの)は女性への暴力、人権侵害であると世界的に大変問題になってきています。北京女性会議でも大きくとりあげられました。日本でも「女性への性器切除と人権侵害に反対し行動する女性たちの会」もでき、行動いはじめています。この本をきっかけにその実態を学んでいきたいと思っています。
是非参加を!

喜びの秘密

アリス・ウォーカー著
(カラー・パーフォイルの著者)
柳沢由美子訳
集英社 2600円
※性器切除がテーマ
になっている小説

本がなくても参加出来ます!

「子供への虐待」を扱ったマンガを読んで

神

「凍りついた瞳」 ささやななえ著（原作／椎名篤子） 集英社

「闇の果てから」 津雲むつみ著 集英社

「残酷な神が支配する」 萩尾望都著 小学館

「凍りついた瞳」が、ある書店のコミックコーナーの片隅に平積みされているのを見つけたとき、私は、こわくて手に取れなかった。「ひー、ささやななえの絵で、『子ども虐待』なんて怖すぎるー」…でも、見ておくべきだよなあ…でも、気が進まないなあ、としばらく葛藤した。何度か通っても、なかなか買う決心がつかなくて、『口直し用』に、内容のわかっている『安全』なコミックスを、2、3冊一緒にかかえて、レジに向かった。

結論から言えば、読んでも、こわくはなかった——大丈夫だった（いや、描かれている内容は、じゅうぶん凄絶なんだけど）。

「よくできたマンガだなあ」と思った。それは、ドキュメンタリータッチで、身体的暴力、性的虐待、放置と八つのケースが描かれていて、主に、虐待の起こっている家庭に介入する、児童相談所や保健所、医療機関といった立場の人々の視点から描かれているのだけど、冷静で、客観的で、でも冷たくなくて、なかなかすぐれているなあ。描かれている虐待のさまは、想像を絶するものがありました。言葉から想起されるイメージは、まだまだ甘かったんだな、というくらい。

でも、「節度のある描き方」という感じがした。「虐待された可愛そうな子供と酷い親」という固定観念に、読者がとらわれないように、話の選び方、並べ方にも気をつけているなど感じるし、加害者である親の気持ちにも踏み込んではいらんだけど、過剰に踏み込んではいないし。解決の糸口が見つからなかったケース、解決の方向へ向かえたケースのそれぞれを描いて、事態に対処するために有効であろう対策を提示していて、全体的にまとまっているなあって、思った。

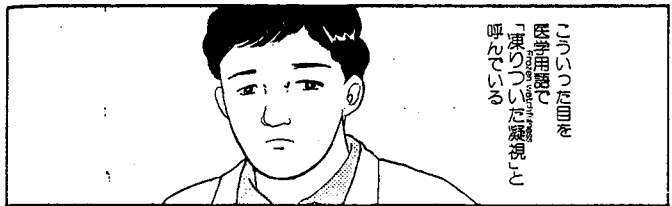
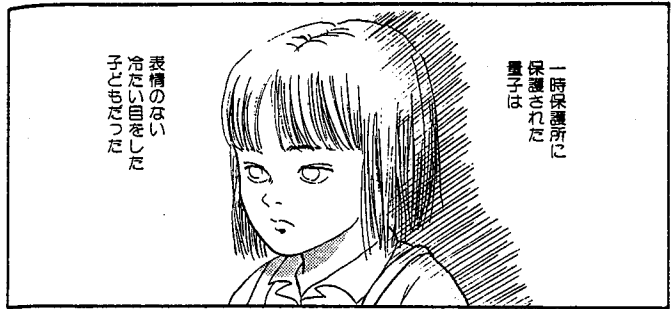
「児童虐待」に関して、こんなふうにくいつかのケースを紹介している本を読んで、ひどく冷たいなと感じたことがある。なんというか「症例報告」なんだよね。著者は現場で頑張っている人なんだろうから、本当に心から「案じて」いるんだろうけど、なんというか言葉使いが冷たいの——「研究材料」の実験動物の「観察記録」みたいだった。…「学術的」な報告っていうのは、そういう言葉使いをしなければならぬものなのかな。だけど、そういう言葉で考えていると、そういう認識の仕方しか、発想できなくなるぞ、と私なんかは思っちゃうんだけどね。言葉の違いは、認識の違いだ。）

「凍りついた瞳」は、淡々と描いているんだけど、そういう冷たさは感じられなくてよかった。

ついでに、「闇の果てから」が文庫になっているのを発見した。

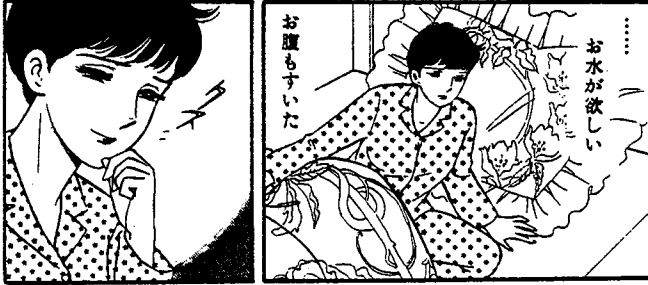
うわー、やだー。なんて言い方しちゃいけないけど、この作品に関しては、もう、なんか違う、なんか違うって、「違和感 感じまくり」だったのよ。（でも「1993年度日本漫画家協会優秀賞受賞作」ですもんね。受賞理由ってどういうものだったのかな。）

「性的虐待を扱ったマンガ」ということで、読んでみたいと思っていたんだけど、シチュエーションが、連続幼女誘拐殺人事件で、その犯人像が「オタクでロリコンの若い男」に設定されていると知った時点で、この作品には期待してなかったけど、この犯人像にも、性的虐待の被害経験者としてのヒロイン像にも、「違和感 感じまくり」だった。…いや、実は「性的虐待」だけじゃなくて、「オタク」にも「ロリコン」にも、ちょっとした思い入れがあるものだから、こんなのウソだ、ウソだ、ウソだって、冒頭か



ら、いらいらしっぱなしだった。

なんというか「チカンにあたり、いやな男にせまられたり」しては「吐いてしまう」ような女性が、死体を発見した上、憎からず思っていた男性（刑事）が、5才のときにレイプされたという自分の過去を知っていたと知って、ショックを受けたその翌日に、目が覚めて「…お水が欲しい／お腹もすいた／クス」は、ないと思うのよ。「吐き気」なんてそんな消化器官に症状が出るような娘が、こんなふう感じられるのかな。「お腹すいた（空腹感）」と「何か食べたい（食欲）」は、一般的には同義に感じられているかもしれないけど、連動していることが多いだけで同義じゃない。——すごくお腹がすくんだけど、



ものは食いたくない。食わなきゃだめだと思って食おうとしても、吐き気がして食えない。…そっちの方が「らしい」気がするんだけどな。続けて「…死にたいと／思っても／肉体は／排泄行為を促すし／しっかり／お腹もすいて／何か食べろって／脳に命令してるわ／…ばかみたい」と描いているんだけど、なんとなーく、納得できなくて。幼児期の事件のあとしばら

く、口もきけず、食事もできなかったような子なのに？…あの「クス」の表情は変だよ。と、ささいなことなだけで、個人的に、非常にウツくさいと感じてしまったワンシーンでした。

周囲の人間が、「ロリコンの変態野郎」と罵りまくることも、ひっかかる。「同じような変態の／手にかかった／他にもたくさんいるだろう／心に傷を残した／小さな子供たちのために」なんて、ヒロインの恋人になる刑事もつぶやく。加害者を、この場合は殺人者でもあるけど、特殊な「変態」、自分達とは違う存在として位置づけて、安心してしまっているのがいやだな…恋人関係だって、望まないセックスを強いた時点で、たいして変わらないことしてるんだと思うんですけどね。「殺人犯は／常に／わたし達の／隣に／いるんです」と、6才のときに被害にあったという女性刑事が言う。…そりゃそうなんだけど、特殊な「変態」が「普通の人ふり」して私たちの隣にいるというよりは、「普通の人」として生活している人が、何かのきっかけで「犯罪者」となるという方が正しいのではないかなと、私は思うの。

たぶん「性的虐待」を「社会問題」としてテーマにしているわけじゃなくて、「物語の素材」として使っているだけなんだろうから、期待の仕方がまちがっているんだろうなとは思う。だからきっとサスペンスとしては、よくできている物語なんだろうな。「事件の目撃者に対するマスコミの対応」などの、いろいろな問題についてちょっとずつ触れていて、「ああこの人、勉強してるんだなあ」とは思ったんだけど、なんとなくこなれていないような感じがして…（生意気言って、すみません）。

私は、同時収録されていたこの作者の別な恋愛物を読んで、絵にもストーリーにもいらいらしっぱなしだったから、この作者の作風が性に合わないだけなのかもしれない。（でも、虐待のせいで、「男性恐怖症」でキスもできないヒロインに、ならし運転よろしく「愛のレッスン」をほどこすというのは、かなりムカつきましたわ。）

「残酷な神が支配する」は、「すごい」です。なんかもう「すごい」「うまい」「完璧」って…あーもー、ボキャブラリー貧困。

なんでー？なんでそんなにわかっているの？リアルに描けるの？やっぱりこの人って「天才」かもしれない——なんて、言いたくなっちゃうくらい。

コミックスのカバーの折り返し（っていうのか？）の「人間の愛憎を鮮烈に描く、注目のサイコ・サスペンス第一集」っていうコピー？は、やめて欲しいと思いましたが——人間の「愛憎」？「サイコ・サスペンス」？…そんな物言いは、ふさわしくないような気がする。こんなにも明確に「性的虐待」がテーマになっているのに…いえ、サスペンスとしても本当に一級品だと思っていますけどね。

あ、物語のシチュエーションとしては、少年が、母親の再婚相手の男（義父）に性的虐待を受けて、殺意を抱くというものなんですけどね、加害者は、地位も財産もあって、周りには人格者として映っているだろうぐらいの「普通の人」で、誰が見ても「異常」だとか「変態」に見える人間ではないところがいい

と思います（虐待のさまを見てしまえば、「変態」にしか見えなだらうけど）。

まず「すごい」と思ったのは、「共犯者」とか「フラッシュバック」とかのキーワードと共に、私が本で読んだ知識が、ちゃんと、キャラクターとして動いている、物語として進行している——ということで、被害者、加害者、周囲の人々という各人の心理描写が、的確というか、リアルで、とても丁寧に、きちんと説明しているという感じがした。んー、虐待の行なわれている時期のその最中に、ここまで明確に、意識化、言語化できている「当事者」って、少ないんじゃないかとは思いますが、わかりやすくいいわ。

そうそう、主人公の少年ジェルミが、授業中におっ倒れるシーンがね「うわ、すごい」と思ったの。うん、構図がね、はたから見て倒れていくじゃなくて、視界が変わって、いきなり床が、背中に「ダン」とぶち当たる衝撃を感じる、というのがね、「おお、主観的にリアルだ」と。

それから、レイブされた翌朝の光景の絵、「ああ、この現実感のない感じ、ジェルミの視界だ。うまい表現だなあ」なんて、そういう細かいシーンにも感動していました。

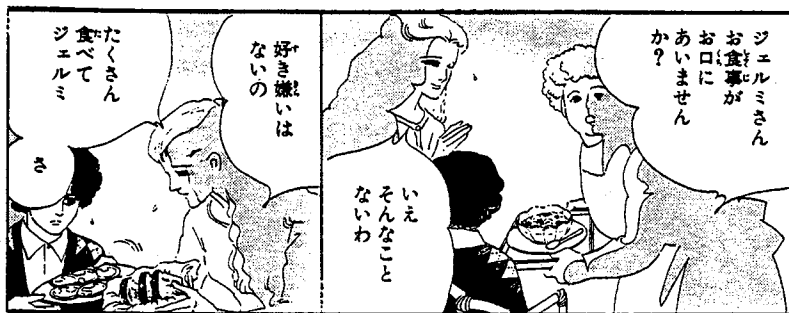
私は、これを初めて読んだとき、とても不安になった——この物語って、どんなふうにも読まれているんだろうって。でも、主人公を「女の子」で描かれたら、きっと「ボルノ」として読む人がいるだろうなと思っちゃうのよ。そういう見方って根深いというか、そういうフィルターが強力に機能しているから（すでに条件反射と化しているとも言う）。

「i m a g o (イマゴ)」の少女マンガ特集の、巖谷國士氏との対談では、少々憤ってしまいました。望都さんが「娘ですとなまなましすぎる」ので、あれは「少年を描いている」けれど「実際の男じゃなくて」と言ってるのに、「父と息子」だからって「エディプス的」だなんて、巖谷國士〜、話ちゃんと聞いとんのか、まったくあんたらはそっちの発想から逃れられんのか（あ、まずい。集団にしちゃった）と。ああ、また失礼な発言をしてしまった（望都さんは、遠慮しいい発言しているふうだったのに）。すみません。

新聞のインタビューでは「肉体的、精神的な傷から人間がどうやって回復していくかを描きたい」とあったので、とっても期待してます。

“癒されていく過程”が、納得できるように描かれている作品を、私はまだ知らないんだ。傷ついているさまの表現は的確なんだけど、「救いに至る過程とその行き着く先」が納得できない作品は、何度か見たんだけど、「ちょっと待てーっ、そんな方法じゃ、絶対に救われぬよお」って思うんだけど、創作された物語だからね、「主人公はそれで幸せになりました、めでたし、めでたし」なのよ。——でもきっと望都さんは、やってくれると思うわ。

4月末に7巻目が出ましたが、6巻目で加害者が死んじゃったので、多少、心安らかに見ることができましたわ。もうどっぶり感情移入しながら読んじゃってるもんで、虐待されるシーンはつらくって…読み



終わった後は、しばらく放心状態だし。

もう頭がまとまらなくて、まともな紹介文になりませんでしたけど、「残酷な神が支配する」は、まだまだこれからなんですね。ああ、早く続きが見たいー。

□

ストッパ核のゴミ派遣団〈ドイツの巻〉

ドイツに学ぶこと

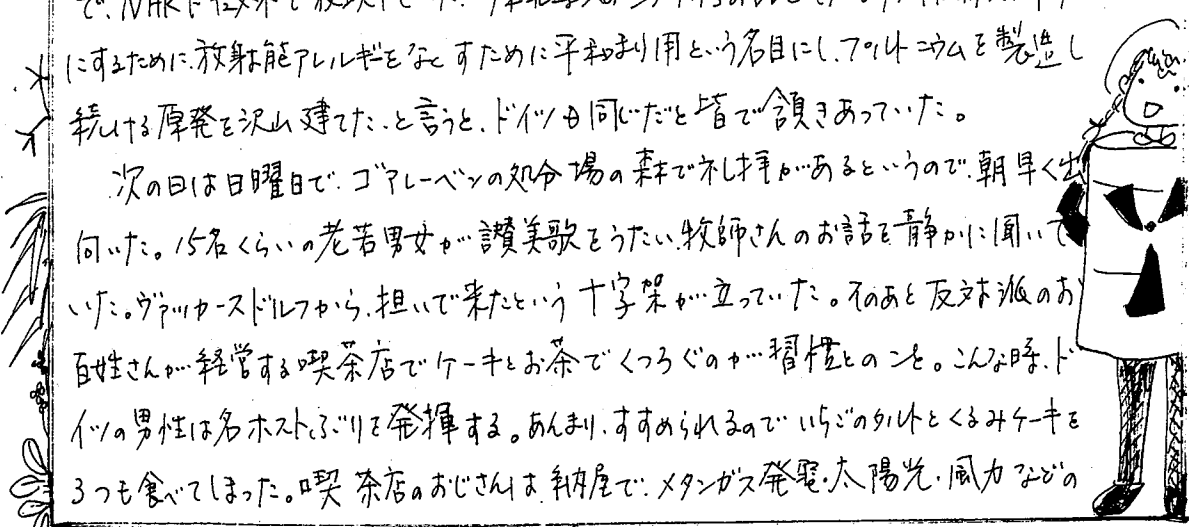
谷百合子

フランスから列車でドイツに向かった。高レベル廃棄物の処分場のある村、ゴアレーベンである。西ドイツの国境、エルベ川の近くに、恐ろしい核の処分場を建てた訳である。統一されると、ドイツの中央になってしまった所である。

メモを無くし、アポを取っていなかったので馬前のBOXの電話帳から、広津貞隆さんの「ドイツの森者たち」にのっている人を探し、電話した。ほとんく、真赤なローゼンにのって74歳になるヨハネさんか、熱烈歓迎で出向かえて下さった。元、牧師としてらしたの事で、今は教会のペンションをしているとのこと。おとぎ話のように美しいドイツの町を見ると、人々の堅実な暮らしが伝わってくる。レンガと木と石で造られた家々は、うっすらと雪化粧をして北海道の風景を思わせた。

次日、ゴアレーベンの中で、60歳以上の反原発の人たちの定例会があるというので参加した。教会とOO会館と一か所にはような可憐い家には、20名程の人達が集っていた。各々、ケーキとホットとろとロックとカゴに入れて参加である。ドイツではロックが生活の一部になっていて、薄暗い湯の中では電気ではなくロックで話としていた。私は帰ってから、つまりロック党になってしまった。六ヶ所と北海道から来たというと、次々と質問が出た。「日本は被爆国なのに、どうして50も原発を建てたのか?」「日本は地震国なのに、原発は大丈夫か?」「原発や核燃料に飛行機が落ちたりしないか?」。そして、原発導入のいきおと聞かされたので、NHKドキュメントで放映していた、「原発導入のシナリオ」の話をした。アメリカの核の傘下にすむために放射能アレルギーをなくするために平和利用という名目に、70年代にウランを製造し続けた原発を沢山建てた、と言うと、ドイツも同じだと皆で合意があった。

次の日は日曜日で、ゴアレーベンの処分場の森が木が枯れているというので、朝早く出向いた。15名くらい、老若男女が、讃美歌をうたい、牧師さんのお話を静かに聞いていた。ヴァッカー・ストルツから、担いで来たという十字架が立っていた。そのあと、反対派の百姓さんが経営する喫茶店でケーキとお茶でくつろぐの習慣のこと。この時、ドイツの男性は名ホストぶりを発揮する。あんまりすすめられるので、いかに外へくつろぎたいと、3つも食べてしまった。喫茶店のおじさんは、納屋で、メタンガス発電、太陽光、風力などの



実験としているマニアであった。でかいトラクターを何台か出して輸送車を止めたところ。
た。ゴッレーベン最後の夜。「今日は最後の夜だから、暖炉を囲んで、それ以外の人生
を語りあいまはう」とおっしゃる。ひいおじい様の使った猫足の椅子に座って、哲学の夜
はふけゆく。ヨハネさんとサビーネさんには7人の子供がいる。5人の男と2人の女。一人も兵後に
つながらなかったのか、自慢と言っていた。彼女は女の運動に力を入れていて、フェミニズムが大切
だと言っていた。「ヒース・キートン」の運動も長年続けている。先の湾岸戦争は石油のための
愚かな戦争でドイツは最初から反対していたと言っていた。上野千鶴子さんの「ドイツの見え
ない壁」と読むと統一の問題の大変さから山積していて、ドイツはどうなる、と悩んでしまった。こ
う。ヨハネさんやサビーネさんたちの反原発の人々は、ドイツの良心、という感じだった。ヨハネさんか
言にはドイツの農民の子たちから自覚の始まり、大人たちや政治家のやるせとじいっと見守っていると
いう。村に一軒しかない、テイスコの入場券の反原発シートだったし、一軒しかない、映画館の
コースターにも反原発のマークが書いてあった。道路にたてかたてかたSTOP・Atomと書いている。
反戦教育を通じて親子がつながり、それから、反原発に力を入れられていると思った。日本と違って
子供から原発のことについて親の運動に参加した例が多い。日本から憲法9条を41ヶ国で
書いたスカーフをお土産に持ってきていた。幸晴(憲法でドイツと真似をしたかった)でできた
た。しかし、自衛隊が強くなくて、ご心配で可ね」とヨハネさんおっしゃっていた。

「突然におじいさまに、その上、大変な世話になす」と言いつつ、サビーネさんか「天使は突然おとされるのよ」と
おっしゃる。愛と平和と哲学のゴッレーベンの村を去り難きを去って次の村、ヴッパーカースドルフへ!

反戦と反原発がひとつになったドイツの運動

ヴッパーカースドルフでは六ヶ所と懷疑に来たことのあるエリサさんに案内してもらった。元教師の彼女は
は70円で自然食の店をやっている。10人の行動で死者5名を生じたヴッパーカースドルフの再処理工場
へ行った。BMWの自動車部など工場にのびた。核の工場はドイツの民主主義に負けたのである。
世界最大の核燃料サイクル六ヶ所村は30名の市民しか集まらない。この違いが何だろうか!

再処理工場が建てられるのを阻止したシュパイトルフの君張(知事)シュライマンは、情報を市民に
知らせた。ドイツは70年代の核武装を「おどろかす」と反戦の人々が立ち上がり、そのうち何年
も前から、自然を尊ぶ運動につながり、そして、チェルノブイリの事故が起きた、放射線の
恐怖のせいで、10万人も人が集まった。元瀬原隆は、反原発運動がベルリンの壁を破って
いくことのきっかけと言う。私も、ドイツに行きそのことを実感した。会談で、「あなたも反戦か
ら反原発に入ったのか?」と聞くと全員「勿論です」と答えた。ヴッパーカースドルフの村は
今も礼拝堂が続いている。混迷のドイツの中で、未来は「希望」に会ったのである。

Information



❖ 「女のスペース・おん」総会とアメリカスタディツアー・報告会

※ ツアーは暴力の被害にあった女性の緊急避難施設「シェルター」視察の旅です。(終了後は交流会を予定)

- ・5月19日(日) PM1:00～総会 3:00～報告会
- ・女性センター(大通西19) 出欠は「おん」へ(622-6404)

❖ 「あいであいであバザー」

- ・5月26日(日) 11:00～2:30 社会福祉総合センター(大通西19)
- ・チェリ/アイリへのかけはし主催(746-2060)

❖ 自由学校「遊」公開講座「沖縄は何と開って113のか」高里鈴代

- ・5月25日(土) PM2:00～5:00
- ・クリスチャンセンター(北7西6) ※前売800 当日1000 問合せ613-3396

❖ 性教育学習会

- ・5月学習会「性器を学ぶ」^{PM} 5/28(土)6:30～ 女性センター ¥400
- ・6月学習会「被害エイズ」6/2(土)PM1:30～5:30 カミズ2・7 ¥600・700(送料)
- 前半A学校模範授業「被害エイズ」、後半「HIV訴訟にかゝる青木一良氏」
- ・性教協いしかりサークル主催(644-2927)

❖ Lズビゲイアライドマーチ札幌

- ・6月30日(日) AM11:00 中島公園集合、正午パレード出発
- ・詳しくは実行委へ(742-7719)

あとがき

忙しい4月を何とか乗り切り、やっと連休！ウレシーイ。友人とゆっくりおしゃべりしたり、映画をみたり。昼寝をしながら、図書館から借りてきた本を読む生活(もちろんたまっていた家事もゆっくりかたずけたし)。何という幸せ！こういう“休養の時”は絶対必要だと思う。鋭気を養って、また忙しい5月を乗り切らなくっちゃ！

PS 最近みたおすすめビデオ、映画—「私の秘密の花」(先日までポラスターで上映)「クライングゲーム」(ビデオ何年か前にカンヌ映画祭で話題になったものらしい)。地味だけど味わいのある映画(後者はちょっと暗いけど)。詳しい話はいつかどこかで……………。(E子)

※ 欠々の「あごら例会」参加してネ!

5/25 喜びの秘密、読書会

(P2 詳報)